

令和 7 年産水稻の栽培管理について

令和7年8月5日

備前広域農業普及指導センター

1 気象の経過と生育状況

(1)気象概況

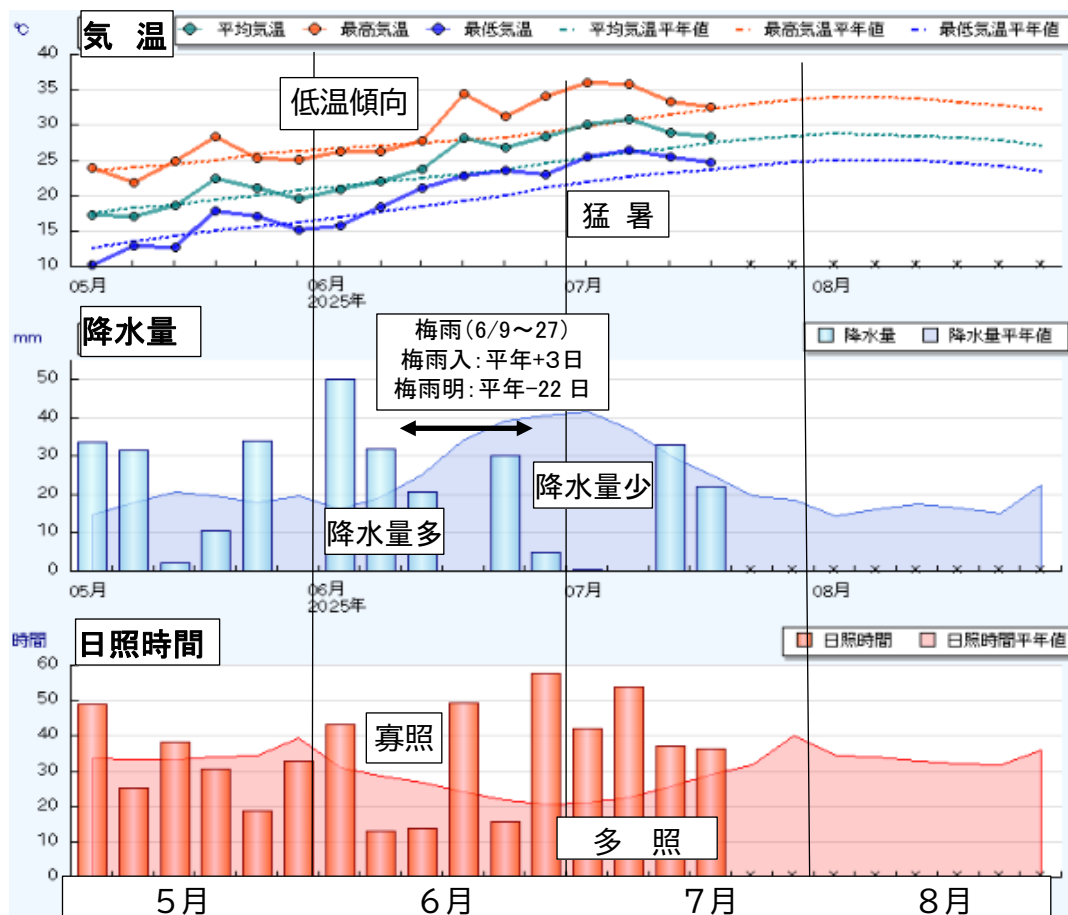


図1 アメダス岡山 半旬別値

(2)水稻の生育概況

【乾田直播】

- ・土壌水分が適度で、発芽苗立ちは良好であった。
- ・ヒエ等の生育速度が速く、一部で、除草剤の処理の遅れによる残草が多かった。
- ・入水後も、概ね順調な生育となっている。

【移植(田植)】

- ・苗の草丈は、6月中旬まではやや短かったが、その後は徒長気味となった。
- ・苗のトラブルは、「過湿による発芽不良」や「ピシウム菌の苗立枯」が散見された。
- ・田植後の活着は、高水温のためやや悪く、除草剤の生育障害も発生した。
- ・藻類の発生が多く、水稻の生育を抑制した。
- ・厳冬の影響からか、初期のジャンボタニシの発生が少なく、被害が少なかった。

2 高温対策を中心と栽培管理

- ・高温の影響により、水稻の収量・品質の低下が心配されます。
- ・施肥管理や水管理などを適切にして、夏の高温に備えましょう。

●3か月予報(7月～9月) ※令和7年7月22日広島地方気象台発表
 (8月) 平均気温: 高い 降水量: ほぼ平年並
 (9月) 平均気温: 高い 降水量: ほぼ平年並
 (10月) 平均気温: 高い 降水量: 平年並が多い見込み



図2 白未熟粒

(1) 水管理

田の中の温度を下げて、稲体の活力を維持するため、可能ならかけ流しや夜間に灌水する。基本は、「**間断灌漑**」を基本に水管理を行う。

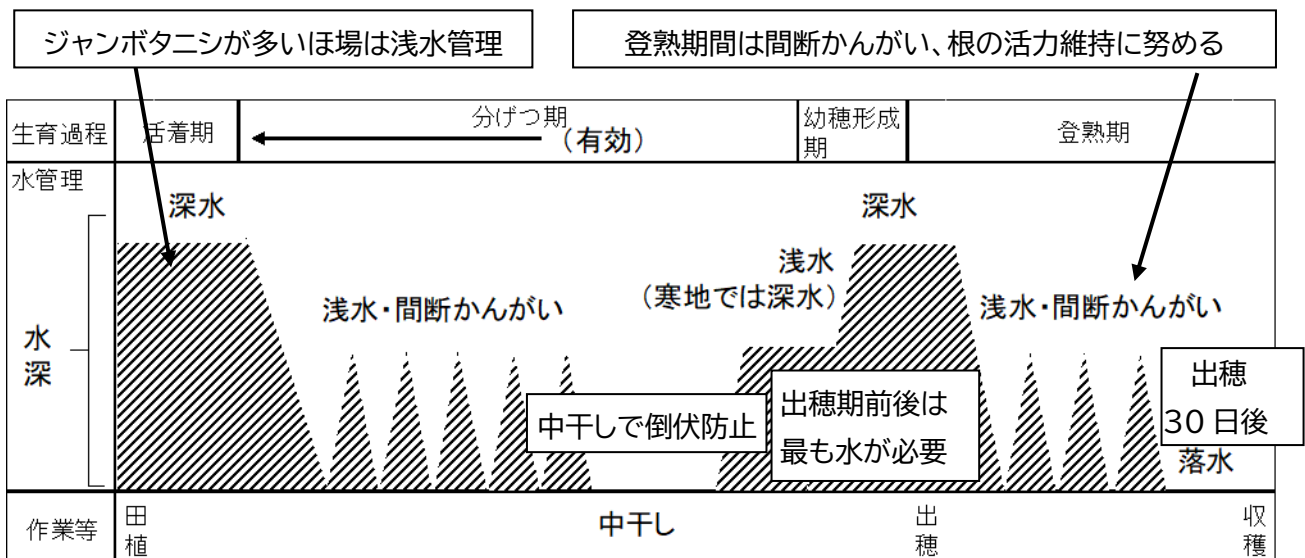


図3 水管理のイメージ

1) 中干し(土用干し)

- ・必要茎数の8割を確保したら、生育状況とほ場の排水性を考慮して中干しを実施する。
- ・干す程度は、足跡がつく程度～軽くひび割れが入る程度を基本とする。
- ・中干し後の入水は、根腐れ防止のため、走り水程度から始め、徐々に湛水する。

2) 幼穂形成期～穂揃期

- ・水分不足は幼穂の伸長に影響するので、水を切らないようにする。
- ・35℃以上の高水温が続く場合、かけ流しにより水温・地温の低下を図る。

3) 穂揃期～登熟期

- ・根の活力維持のために田の表面に水があったり、なかったりの「**間断灌漑**」を基本とする。

4) 落水時期

- ・早期落水は、未熟粒や屑米、胴割粒や茶米が増加して、収量品質が低下する。
- ・落水は、ほ場の排水性を考慮して、出穂30日後をめやすにできるだけ遅らせる。

(2) 施肥管理

1) 基肥一発肥料

- ・高温が続いて、幼穂形成期(土用干し後)に葉色が薄い時は、窒素成分を追肥する。(高温に強いとされる品種(「にこまる」等)でも追肥が必要な場合があります)
- ・時期は、出穂 15 日前頃から穂揃期の間
(出穂 15 日前:「ヒノヒカリ」8/13 頃、「にこまる」 8/15 頃、「アケボノ」8/20頃)
- ・量は、窒素成分で1~2kg/10a
(「硫安」:5~10kg/10a、「化成肥料 14-8-8」:10kg/10a)とする。

2) 分施肥体系

- ・出穂の 25~18日前と出穂 10 日前頃の2回に分けて、「化成 14-8-8」等を 10~15kg/10a・回を目安に、品種や葉色によって施用時期や量を調整して追肥する。

表 1 幼穂の大きさと出穂前日数、穂肥の時期

幼穂長	出穂前	幼穂段階	穂肥の時期
0.5~1.0 mm	-25 日	二次枝梗分化期	穂肥1回目(ヒノヒカリ)
1.0~1.5 mm	-23 日	穎花分化前期	穂肥1回目(きぬむすめ、アケボノ)
3.5~15mm (10mm 前後)	-18 日	穎花分化後期	穂肥1回目(朝日など倒伏しやすい品種)
4~18cm	-12 日	減数分裂期	穂肥2回目(各品種共通)

【穂肥の効果】 1 回目:幼穂の成長、葉色の回復、籾数の確保。施用時期が早いと下位の節間が伸長し倒伏しやすくなる。

2 回目:葉色の回復、炭水化物の生産、登熟の向上。

(3) 病虫害防除

- ・高温年に多発しやすいウンカ類やコブノメイガ、紋枯病に注意する。

表 2 病虫害発生予察

(岡山県病虫害防除所 令和 7 年 7 月 30 日発表)

病虫害名	発生時期	発生量	病虫害名	発生時期	発生量
葉いもち(中生・晩生)	—	やや少	ニカメイガ	並	並
穂いもち(極早生・早生)	—	並	セジロウンカ	—	やや少
紋枯病	—	やや少	トビイロウンカ	並	やや少
白葉枯病	並	並	イチモンジセセリ	並	やや少
穂枯れ(早生・中生)	—	やや多	コブノメイガ	—	やや少
			斑点米カメムシ	—	<u>やや多</u>

注) 斑点米カメムシ類は、6 月 30 日に「植物防疫情報第 2 号」、7 月 30 日に「植物防疫情報第 3 号」が発表された。

県内でトビイロウンカの飛来は確認されていない(7/25 現在)が、近隣の県では飛来が確認された。

1) 本田防除

- ・JA 栽培暦を参考に、出穂期前後(穂ばらみ期、穂揃期)の基幹防除2回を徹底する。
- ・発生予察情報に注意しつつ、ほ場観察を十分に行い、的確に防除する。
- ・粒剤を散布する場合は、予防的な効果となるため、適用範囲内で早めの散布を心がける。

2)主な病害虫

●トビイロウンカ

【被害の発生と生態】

- ・ウンカは日本国内では越冬はせず、中国大陸南部で発生したウンカが、梅雨前線の南部に発達するジェット気流に乗り飛んでくる。
- ・多発すると吸汁害によりイネの黄化が起こり、排せつ物は黒いカビができる「すす病」となり、著しい場合は「坪枯れ」となり収量、品質を低下させる。



図4 トビイロウンカの成虫
写真は農作物病害虫雑草図鑑より引用

【対策】

- ・ウンカ(幼虫、成虫)が1株当たり 10 頭以上または短翅型雌成虫が1株当たり 0.2 頭以上発生している場合は、直ちに防除する。
- ・ウンカ類は、株元で増殖するため、薬剤散布は、気流が下に向いて流れている朝または夕方に行い、株元に薬剤が届くように注意する。

●コブノメイガ

【被害の発生と生態】

- ・蛾の幼虫が葉を縦に巻き、内側から食害するので、葉が白いすじになって目立つ。
- ・肥料のよく効いた田で多発することが多い。

【対策】

- ・チョウ目に効果のある箱施用剤で 7～8 月世代のコブノメイガを抑える。箱施用剤の残効が切れた後は、出穂前に効果のある本田散布剤を散布するのがポイントとなる。

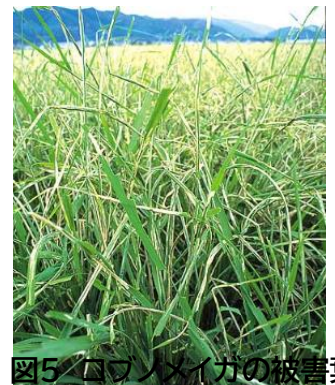


図5 コブノメイガの被害葉

●斑点米カメムシ類

【被害の発生と生態】

- ・周囲より出穂が早い田、早生品種、休耕田や牧草地の周辺、山寄りの水田での被害が大きい。
- ・イネの出穂前は、イネ科雑草に生息し、稲が出穂すると水田へ移動してくる。
- ・傾穂期から乳熟期にかけての約2週間が、最も被害を受けやすい。
- ・籾殻の吸汁跡が目立たないため、穂を見ただけでは、被害に気づきにくい。籾摺り後にわかることが多い。加害したカメムシの種類によって斑点の出方が異なる。



図6 大型カメムシによる斑点米

【対策】

- ・田の中にカメムシを追い込まないために出穂前後 14 日間は畦畔の草刈りをしない。
- ・大型カメムシの発生が多いので、穂揃期の防除で対応する。

●紋枯病

【被害の発生と生態】

- ・最初は水際の葉鞘に暗緑色で不鮮明な斑紋ができ、その後楕円形で灰色から灰白色の病斑ができる。
- ・植え付け苗数が多い場合や多肥栽培、前年発生が多かった所は注意する。
- ・分けつ最盛期以降、高温多湿の時に発病が多い。

【対策】

- ・上位葉鞘へ進展するようなら、遅れないように防除する。
- ・粒剤は、出穂2～3週間前に散布にする。



図7 紋枯病の病斑

写真は農作物病害虫雑草図鑑より引用

3 収 穫

- ・高温年では、収穫期が早まり刈遅れると、茶米や胴割米が増えて、品質低下の原因となる。
- ・収穫適期は、出穂後日数と積算温度からおおよその目安を定め、実際に穂を観察し、青味籾率から最終判断する。
- ・刈取り始めの籾の水分は、25～26%程度が目安である。
- ・青味籾率の確認
 - ①平均的に育っている株の最も丈の高い穂を選ぶ。
 - ②穂の中で不稔籾を除き、青味籾の割合を見る。
- ・特に「にこまる」は、登熟期が低温の場合に成熟が遅れたり、青未熟粒が多発することがあるため、籾の成熟度合いを見て適期を判断する。

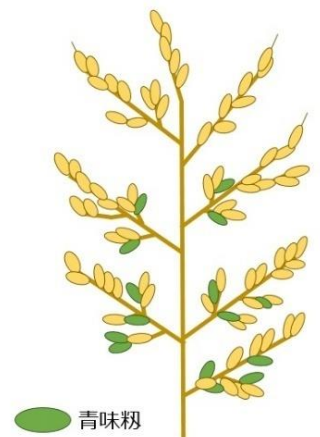


図8 青味籾率約 20%

表3 品種ごとの収穫適期の目安

品 種	出穂後積算温度	出穂後日数	青味籾率
きぬむすめ	950～1,100℃	38～45日	25～10%
ヒノヒカリ	950～1,100℃	38～45日	20～5%
朝日、アケボノ	900～1,100℃	40～50日	15～3%
にこまる	1,000～1,200℃	40～50日	20～6%

注1) 青味籾率とは不稔籾を除いた全籾のうち、青味が残っている籾の割合

注2) 岡山県地域稲作戦略推進会議資料と作物研究室主要成果より引用

出穂期(数え始める)

穂揃い期

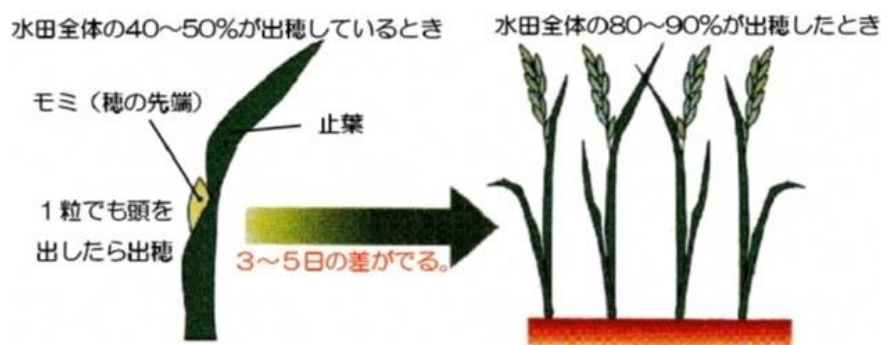


図9 出穂期と穂揃い期の見分け方

4 乾燥・調製

- ・計画的な収穫を行い、刈取後はすみやかに乾燥作業に入る。
- ・収穫後すぐに乾燥作業に移れるよう、乾燥機の容量に合った計画的な収穫を行う。
- ・収穫後の粃を乾燥機へ入れず、コンバイン袋のまま置いておくと、ヤケ米(発酵米)となり品質低下の原因となる(水分25%の粃は、気温25℃の状態、5時間程度で変質し始める)。
- ・仕上げ水分は14.5～15.0%を目標とし、ゆっくりと乾燥させる。
- ・過乾燥は、形質や食味の低下を招くおそれがあるため、適正な粃水分になるように乾燥する。
- ・水分が高い粃は十分に常温送風してから加温し始め、毎時乾減率を0.8%以下に抑えてゆっくり乾燥させる。

■農作業中の熱中症を予防しましょう■

- あらかじめ体温を下げておき、作業中に体温が上がることを緩やかにしましょう。
- 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業しましょう。
- のどの渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給しましょう。
- 単独の作業はできるだけ避けましょう。単独で作業を行う場合は、時間を決めて家族などと連絡を取り合しましょう。
- 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用、空調服や送風機を活用しましょう。

■施肥コスト低減対策技術を公開中■

農業研究所が開発した施肥コスト低減対策技術を紹介しています。

- レンゲやナタネを緑肥としてすき込む場合の肥料計算ソフト
- 児島湖流域の6割の水田でりん酸やカリウムが少ないL字型が適する説明
- 鶏ふん施用から入水まで期間を考慮した施肥設計方法 等



■農作業の安全対策情報を公開中■

農林水産省公式 YouTube チャンネル「Maffchannel」で農業における事故事例と安全対策を公開しています。
今一度、作業環境について確認しましょう。

<公道での農機による事故防止>

安全確認とシートベルト・ヘルメット着用でトラクター事故を防ぎましょう



こちらから(動画)